

【日本昔ばなし】瓜子姫子

動画リンク: <https://youtu.be/P2lpRsBRyPo>

今回は日本の昔ばなし、「瓜子姫子」を学びながら、日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「瓜子姫子」は、とても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「瓜子姫子」のお話を始めます。

むかし、むかし、おじいさんとおばあさんがいました。

ある日おじいさんは山へしばかりに行きました。

おばあさんは川へ洗たくに行きました。

おばあさんが川でぼちゃぼちゃ洗たくをしていますと、向こうから大きな瓜が一つ、ぽっかり、ぽっかり、流れてきました。

おばあさんはそれを見て、「おやおや、まあ。めずらしい大きな瓜なこと、さぞおいしいでしょう。うちへ持って帰って、おじいさんと二人で食べましょう。」

といい、つえの先で瓜をかき寄せて、拾い上げて、うちへ持って帰りました。

夕方になると、おじいさんはいつものとおり、しばを背負って山から帰って来ました。

おばあさんはにこにこしながら出迎えて、「おやおや、おじいさん、お帰りなさい。

きょうはおじいさんのお好きな、いいものを川で拾って来ましたから、おじいさんと二人で食べましょうと思って、さっきから待っていたのですよ。」

といて、拾って来た瓜を出して見せました。

「ほう、ほう、これはめずらしい大きな瓜だ。さぞおいしいだろう。早く食べたいなあ。」と、おじいさんはいいました。

そこでおばあさんは、台所から包丁を持って来て、瓜を二つに割ろうとしますと、瓜はひとりでに中からぼんと割れて、かわいらしい女の子がとび出しました。

「おやおや、まあ」といったまま、おじいさんもおばあさんも、びっくりして腰を抜かしてしまいました。

しばらくしておじいさんが、「これはきっと、わたしたちに子供の無いのをかわいそうに思って、神さまがさずけてくださったものにちがいない。だいじに育ててやりましょう。」

「そうですとも。ごらんなさい。まあ、かわいらしい顔をして、にこにこ笑っていますよ。」と、おばあさんはいいました。

そこでおじいさんとおばあさんは、あわててお湯をわかして、赤ちゃんをお風呂に入れて、温かい着物の中にくるんで、かわいがって育てました。

瓜の中から生まれてきた子だから というので、瓜子姫子という名前をつけました。

瓜子姫子は、いつまでもかわいらしい小さな女の子でした。

でも機を織ることが大好きで、かわいらしい機をおじいさんに作ってもらって、毎日、毎日、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、ぎいばったん、機を織っていました。

おじいさんはいつものとおり、山へしばかりに出かけます。おばあさんは川へ洗たくに出かけます。

瓜子姫子は一人、おとなしくお留守番をして、あいかわらず、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、機を織っていました。

おじいさんとおばあさんは、いつも出がけに瓜子姫子に向かって、

「この山の上には、あまのじゃくという悪者が住んでいる。留守にお前をさらいに来るかも知れないから、けっして戸を開けてはいけないよ。」

といて、しっかり戸を閉めて出て行きました。

するとある日のこと、瓜子姫子が一人、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、機を織っておりますと、とうとうあまのじゃくがやって来ました。

そしてやさしい猫なで声をつくって、「もしもし、瓜子姫子、この戸を開けて おくれよ。二人で仲よく遊ぼうよ。」といいました。

「いいえ、開けられません。」と、瓜子姫子はいいました。

「瓜子姫子、少しでいいから開けておくれ、指の入はいるだけ開けておくれ。」「それなら、それだけ開けましょう。」

「もう少し開けておくれ、瓜子姫子。せめてこの手が入るだけ。」「それなら、それだけ開けましょう。」

「瓜子姫子、もう少しだ。開けておくれ。せめて頭の入るだけ。」

しかたがないので、瓜子姫子は頭の入るだけ開けてやりますと、あまのじゃくはするすとうちの中へ入って来ました。

「瓜子姫子、裏の山へ柿を取りに行こうか。」と、あまのじゃくがいいました。

「柿を取りに行くのはいや。おじいさんにしかられるから。」と、瓜子姫子がいいました。

するとあまのじゃくが、こわい目をして瓜子姫子をにらめつけました。瓜子姫子はこわくなって、しかたなく裏の山までついて行きました。

裏の山へ行くと、あまのじゃくはするすと柿の木によじ登って、真っ赤になった柿を、おいしそうに取っては食べ、取っては食べました。

そして下にいる瓜子姫子には、種や、へたばかり投げつけて、一つも落としてはくれません。瓜子姫子はうらやましくなって、

「わたしにも一つください。」といいますが、あまのじゃくは、「お前も上がって、取って食べるがいい。」

といいながら、下へおりて来て、こんどは代わりに瓜子姫子を木の上のにせました。

のせるときに、「そんな着物を着て登るとよごれるから。」といって、自分の着物ととりかえて着がえさせました。

瓜子姫子がやっと柿の木に登って柿を取ろうとしますと、あまのじゃくは、どこから取って来たか、藤づるを持って来て、瓜子姫子を柿の木にしばりつけてしまいました。

そして自分は瓜子姫子の着物を着て、瓜子姫子に化けて、うちの中に入って、すました顔をして、また、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、機を織っていました。

しばらくすると、おじいさんとおばあさんは帰って来ましたが、なんにも知らないものですから、

「瓜子姫子、よくお留守番をしていたね。さぞさびしかったろう。」といって、頭をさすってやりますと、

あまのじゃくは、「ええ。」といいながら、舌をそっと出しました。

するとおもての方が、急にそうぞうしくなって、りっぱななりをしたお侍が大勢、ぴかぴかぬり立てた、きれいなかごを かついでやって来て、

おじいさんとおばあさんのうちの前にとまりました。

おじいさんとおばあさんは、何事かはじまったのかと思って、びくびくしていると、

お侍が、おじいさんとおばあさんに向かって、「お前の娘はたいそう美しい織物を織るという評判だ。

お城の殿さまと奥方が、お前の娘の機を織るところが見たいという仰せだから、このかごに乗って来てもらいたい。」といました。

おじいさんとおばあさんは大層喜んで、瓜子姫子に化けたあまのじゃくをかごに乗せました。

お侍たちがあまのじゃくを乗せて、裏の山を通りかかりますと、柿の木の上で、

「ああん、ああん、瓜子姫子の乗るかごに、あまのじゃくが乗って行く。」という声がしました。

「おや、へんだ。」と思って、そばへ寄ってみますと、かわいそうに瓜子姫子は、あまのじゃくのきたない着物を着せられて、木の上にしばりつけられていました。

おじいさんは瓜子姫子を見つけると、急いで行って、木から下ろしてやりました。

お侍たちも大層おこって、あまのじゃくをかごから引きずり出して、その代わり瓜子姫子に乗せてお城に連れて行きました。

そしてあまのじゃくの首を斬り落として、畑の隅に捨てました。

その首から流れ出した血が、きび殻にそまって、きびの色がその時から赤くなり出しました。

日本昔ばなし「瓜子姫子」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

